

利用されなくなったことが原因の一つとなっています。

ウ 二次林

コナラ、クヌギ、アカマツ林等は、薪や炭の優れた材料として、落葉は肥料として利用されてきました。このため、かつては10～30年ごとに伐採されており、樹木は小さく、太陽が入る明るい林床が広がっていました。このような二次林では、明るい林床を好むカタクリ、その花に吸蜜するギフチョウのような昆虫も見られます。しかし、薪炭や肥料として利用されることが少なくなり、過疎化等の影響も受け、放置された二次林が多く見られるようになっていきます。放置された二次林では、木が大きくなり、ソヨゴなどの常緑広葉樹やササ類が成長し、林床に太陽光が届きにくくなるなど、動植物の生息・生育環境の変化により、こうした環境に特有の多様な生物の消失が懸念されます。

エ 人工林

人工林は植栽後の下刈り・除伐等の保育や、必要な時期に間伐等の適正な整備を行なうことによって、山地災害や地球温暖化の防止、水源かん養などの公益的機能を発揮します。

近年、林業の低迷により、適正な整備が行われない人工林が一部で見られるようになり、森林が本来もつ公益的な機能へ支障をきたすおそれがあり、林内にある草本や低木類が日照不足により十分生育できず、また、地表面の土壌が露出して降雨によって流れやすくなるなど、森林内やその周辺に生息・生育する動植物への影響等が懸念されます。

オ 人と鳥獣のあつれきの増加

人による適度な自然への関与が失われることによる影響は、サル、イノシシ、シカ等の野生鳥獣にも現れています。奥山の自然地域と里地里山地域との境界域や奥山の自然地域に生息していたこれらの中・大型哺乳類が、その生息分布域を拡大している傾向が見られます。図1-2-7は、日本全国を5キロメートル四方のメッシュに区域分けし、区域ごとにイノシシの1978年（昭和53年）及び2003年（平成15年）の生息状況を示したものです。これらの図を見ると、イノシシは、農耕地、二次林・植林地に分布域を拡大していることが分かります。これは、このような地域において、耕作放棄地が拡大して草や灌木等が繁茂し、そこがイノシシにとって人からの隠れ場となるような安全地帯となっていることや里山等において人間の活動が低下したことにより、森林から耕作放棄地へとイノシシの移動に適した状況となっていることなどが、原因の一つとして考えられます。

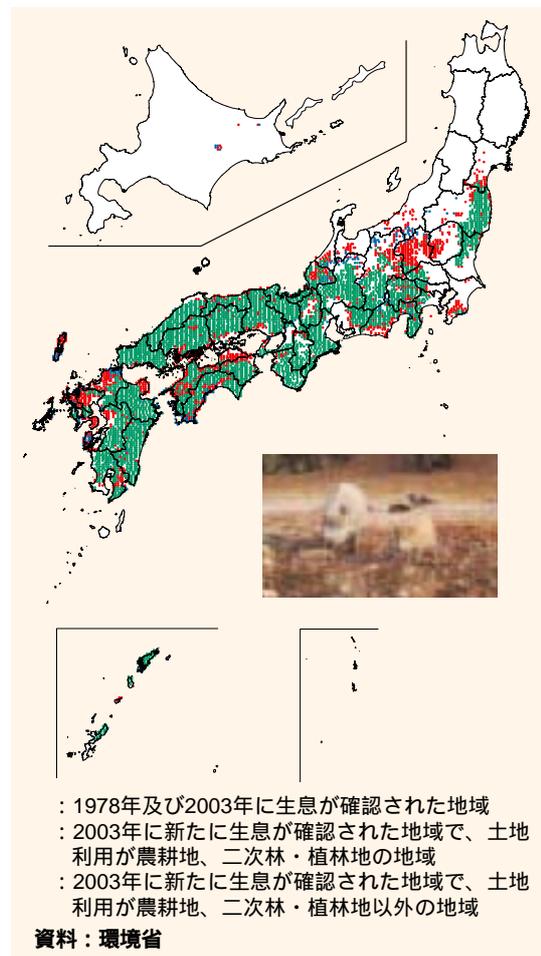
イノシシ等の生息分布域の拡大はこのほかにも温暖化による積雪量の減少をはじめとした気候的要因などが重なったためと考えられています。

人による適度な自然への関与が失われることは、サル、イノシシ、シカ等の生息分布域の拡大のほか、野生鳥獣による農林業への被害にもつながっています。「鳥獣害対策に関する行政及び農業団体等に対するアンケート調査結果（速報版）」（平成17年農林水産省）によると、イノシシについては、被害が増加したと回答した農業団体等が全体の約半分を占めています。鳥獣被害の拡大は営農意欲の低下等を招き、それが耕作放棄地の拡大にもつながり、結果としてさらなる鳥獣被害を生むという悪循環をもたらしていると考えられます。

このほか、集落に頻繁にサルやイノシシが現れ、人と鳥獣のあつれきが増加する傾向が見られます（表1-2-1）。

このような、人と野生鳥獣とのあつれきを軽減するためには、野生鳥獣の適切な保護管理を行うとともに、防

図1-2-7 イノシシの拡大分布域のうち、農耕地、二次林・植林地の地域



- ：1978年及び2003年に生息が確認された地域
- ：2003年に新たに生息が確認された地域で、土地利用が農耕地、二次林・植林地の地域
- ：2003年に新たに生息が確認された地域で、土地利用が農耕地、二次林・植林地以外の地域